占領と文学

オリジン出版センター

占領と文学

「占領と文学」編集委員会 編

オリジン出版センター

占領と文学

1993年10月15日　発行

著　　者　「占領と文学」編集委員会

発 行 者　武内　辰郎

発 行 所　(株)オリジン出版センター
東京都新宿区岩戸町16　メジャー神楽坂402(〒162)
電　話　(03)3260-0453
FAX　(03)3267-8697

装　　幀　ローテ・リニエ

印　　刷　K M S

落丁本・乱丁本はお取り替えします

ISBN 4-7564-0175-9

はじめに

一九八九年秋、長崎で開かれた国際シンポジウム「核と文学――アジアから見たナガサキ」以来、日本社会文学会（代表・西田勝）は、文学の立場からアジア・太平洋地域における《被害》と《加害》の関係に注目し、その解明を通じて同地域、さらには世界の末永い平和と繁栄に寄与しようと志向していた。そして、この問題を総体として究明する場所としては、アジア・太平洋戦争の末期、悽惨な戦場となり、戦後は米国の直接占領下に置かれ、現在もその基地の存在に苦しむ沖縄が最適との結論に達し、呼びかけたところ、沖縄各界の熱い支持を受け、一九九一年二月、国際シンポジウム「占領と文学」実行委員会（代表・仲程昌徳）が誕生し、ここに同委員会と沖縄県国際交流財団及び沖縄タイムスの共催により、同年一一月一六日・一七の両日、次のような内容で那覇市沖縄タイムス・ホールで同シンポジウムが開催された。

日程　第一日（一六日）午前の部（九時～一二時）　パネリストによる問題提起
　　午後の部（二時二〇分～五時二〇分）　同　右
　　第二日（一七日）午前の部（九時～一二時）　同　右
　　午後の部（二時～六時）　討　論

パネリスト　キャサリン・アゴン（教育家・グアム）、色川大吉（歴史家・日本）、任軒永（文芸評

論家・韓国)、ジョン・ラッセル(社会学者・米国)、タック・チチバンナ(作家・タイ)、呂元明(日本文学研究家・中国)、モフタル・ルビス(作家・インドネシア)、楊松年(抗日マラヤ文学研究家・シンガポール)、黄春明(作家・台湾)、シオニール・ホセ(作家・フィリピン)、ワレリー・ポウオリャエフ(作家・ソ連)、小田実(作家・日本)

発言者　大城立裕(作家・沖縄)、趙東淑(韓国文学研究者・韓国)

挨拶　大田昌秀(沖縄県知事)

座長　西田勝(法政大学教授)、福地曠昭(教育家・沖縄県国際交流財団副理事長)

延べ一三時間、びっしり率直で内容豊かな発言が続き、参加者も島外からをふくめ二五〇人を越え、質量ともに充実したシンポジウムとなった。

なお、シンポジウムに先立ち、一五日午後三時より宜野湾市の沖縄国際大学で研究発表会「沖縄の文化」が次のような内容で行なわれた。

第一分科会　思想・状況　米軍の対沖縄文化・教育政策　宮城悦二郎(琉球大学教授)

沖縄の思想的立場　川満信一(詩人)

第二分科会　小説　沖縄の近代小説　仲程昌徳(琉球大学教授)

『カクテル・パーティー』論　岡本恵徳(琉球大学教授)

第三分科会　詩　沖縄戦後詩史　大城貞俊(詩人)

沖縄・詩・状況・表現　高良勉(詩人)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook

この研究発表会の方も島外からもふくめ全体で二〇〇人近くの参加者があり、盛会だった。

本書は以上のシンポジウムと研究発表会の発言を再構成したものに、付録として当日は読み上げられなかったパネリストの報告を加えたものだ。すなわち第一部はシンポジウムの速記録に必要な補筆を施し、第二部には当日の発表とは違う内容のエッセイも収められている。川満・岡本・大城三氏以外の文章がそれで、ただし高良氏の発表は氏の都合で収録が間に合わなかった。またマイケル・モラスキー氏の文章は、当日、氏が急病となり、発表できなかったもの。

シンポジウムは、かってのアメリカによる日本占領、日本によるアジア・太平洋地域の占領をはじめ、それに前後するさまざまな占領の事例も取り上げ、活発な意見交換を通じて占領が被占領国や地域にあたえる影響を多面的に明らかにした。例えばアメリカによる日本占領や日本によるインドネシア占領の場合に見るように、占領は常に被占領国や地域に《被害》だけをあたえたのではなく、古い軍国主義体制を倒壊させたり、民族的自覚をあたえたりすること、けれども占領はやはりどこまでも占領であり、究極的には被占領国や地域の政治や経済や文化に抑圧的な影響を与え、アイデンティティーを失わせる傾向を持つことが多くのパネリストによって指摘された。また《知的占領》（軍事的占領によって政治や経済だけが占領されるのではなく、知性や感性までもが占領されるという考え方）、あるいは《占領の内在化》（知性や感性まで占領されることによって民族固有のアーデンティティーを失って行くこと）、また《内なる占領》（民族国家内における少数民族への差別や支配）等の新しい視角が提出されたのも、今回シンポジウムの大きな収穫だったと思う。

研究発表会でも沖縄の政治・経済・思想・文学を通じて占領の具体が検証され、民族や国家を越えた《琉球》への模索も語られ、参加者に深い感銘をあたえた。

それだけに国際シンポジウム「占領と文学」の反響は大きく、これを伝える新聞記事だけでもB4版に集めて二七頁に及んだ。

今回の会議は規模が規模だけに多くの資金を必要とした。前記の団体をはじめ、りゅうぎん国際化振興財団・うるま学術奨励基金、那覇市等の沖縄県自治体、自治労県本部、県高教組等の労働団体、沖縄電力等の企業、島内外の人々の好意ある援助なしには、その開催は不可能だった。

なお沖縄国際大学には実行委員会事務局だけではなく、研究発表会にも部屋を提供していただいた。またその準備過程において仲宗根悟（日本社会党沖縄県本部書記長）・我部政男（山梨学院大教授）の各氏らに、そして本書の作成に当たっては法政大学西田勝研究室の谷本澄子・趙夢雲・李甲淑・名越覚の各氏らにお世話になった。記してここに感謝の意を表したい。

一九九三年九月

「占領と文学」編集委員会

仲程　昌徳　　浦田　義和（九州女子大教授）

黒澤亜里子（沖縄国際大助教授）　　寺田　清市（日本社会文学会地球交流局）

西田　勝

占領と文学——目次

はじめに……1

第一部　国際シンポジウム　占領と文学

第一日　午前の部

問題提起

アジア・太平洋地域での「被害」と「加害」……座長　西田　勝……13

スペイン・米国・日本のグァム占領とチャモロ人……キャサリン・アゴン……17

太平洋戦争の本質……色川大吉……28

アメリカの沖縄占領……大田昌秀……44

韓国の「基地村」と売春婦……任　軒永……48

アメリカの知的日本占領……ジョン・ラッセル……60

第一日　午後の部

私の占領体験……座長　福地曠昭……75

日本軍によるタイ占領と抵抗文学……タック・チチバンナ……85

在華日本人反戦文学……呂　元明……90

インドネシア人の「ロームシャ」と慰安婦……モフタル・ルビス……94
文学としての沖縄……大城立裕……105
韓国文学に現われた分割占領……趙東淑……112

第二日　午前の部

シンガポール・マラヤの抗日文学……楊松年……119
台湾の「内なる占領」……黄春明……133
フィリピン人の敵は誰か？……シオニール・ホセ……140
ナチのソ連占領とアフガニスタン戦争……ワレリー・ポウォリャエフ……149
被害者が加害者となる……小田実……152

第二日　午後の部

討　論

占領の多面性……座長　西田勝……169
内在化された占領……キャサリン・アゴン……170
新たな親日派の登場……任軒永……174
「皇民化」と沖縄文学……色川大吉……176

アフリカ系アメリカ人として……ジョン・ラッセル……178
日本人の侵略責任……モフタル・ルビス……181
ミルクや調味料の侵略……タック・チチバンナ……183
民衆同士の交流こそ……黄　春明……184
傲慢な日本人……シオニール・ホセ……185
文学と政治の目的はひとつ……ワレリー・ポウォリャエフ……187
「北」の人間としての責任……小田　実……188
経済侵略か開発か……モフタル・ルビス……190
『広場の孤独』と占領……荒木　傳……201
コカ・コーラの排水処理……宇井　純……204
占領の原体験……昆　豊……209
疎外された人々の声となれ……キャサリン・アゴン……213
日本はアジアの繁栄のためにつくせ……任　軒永……213
身体を売ってきた人々の文学化……色川大吉……213

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

いい文学を読む読者を作ること……ジョン・ラッセル……214
このような会議をまた日本で……楊　松年……215
今日の議論を中国へ……呂　元明……215
作家は真剣に、正直に、責任をもって描け……モフタル・ルビス……216
ぜひ台湾を自分の目で……黄　春明……217
もっとも大切なものは正直……シオニール・ホセ……218
戦争はどれほど悲しいか……ワレリー・ポウォリャエフ……219
外国人労働者と民族国家の問題……小田　実……219
占領体験の深層……大城立裕……221
知識人の役割……座長　福地曠昭……223
アジア・太平洋のよりよい未来と平和に向けて……座長　西田　勝……226

第二部　沖縄の思想と文学

アメリカ文化との遭遇……宮城悦二郎……233

「琉球共和社会憲法草案」の思想……川満信一……245
沖縄近代小説の焦点……仲程昌徳……265
『カクテル・パーティー』論……岡本恵徳……283
占領と性とオキナワのアイデンティティー……マイケル・モラスキー……295
沖縄戦後詩史……大城貞俊……310

付　録

関露と『女声』……呂元明……321
日本占領下のインドネシア文学……モフタル・ルビス……328
フィリピン文学とその植民地的遺産……シオニール・ホセ……340
A Summary of the International Symposium "Occupation and Literature" and Workshops for Okinawan Culture……353
パネリスト・発言者紹介……361
研究発表者紹介……360

第一部　国際シンポジウム〈占領と文学〉

第一日　午前の部（九時から一二時まで）

アジア・太平洋地域での「被害」と「加害」（座長挨拶）

西田　勝

これから始めます。はじめにパネリストの皆さんを御紹介致します。予定していたパネリストのうち、ただ一人だけ、いろいろな事情があって、こられなくなりました。マレーシアのサマッド・サイドさんです。それ以外の予定していたパネリストは、すべて来ております。私の隣（右）にいらっしゃる方が、グアムからいらっしゃったキャサリン・アゴンさんです。その次が、韓国から来た任軒永（イム・ホニョン）さんです。それから向う（左）にいらっしゃるのが、色川大吉さんです。その左にいらっしゃる方が、ジョン・ラッセルさん。アメリカを代表して来ております。午前中は、以上壇上に上がっている人の他に、途中から大田（昌秀）県知事がお出になりまして、短いスピーチをすることになっています。その他の方は今、フロアにおりますので、名前をお呼びします。起っていただければ、ありがたいと思います。タイからタック・チチバンナさんが来ておられます。それから中国から呂元明（ルイ・ユアンミン）さんがお出でになっています。インドネシアからはモフタル・ルビスさんが来ておられます。今日、最後にスピーチを予定している、沖縄の作家の大城立裕さんも見えております。次

は明日、報告を担当する方ですが、シンガポールから楊松年（ヤン・ソンニヤン）さん。台湾からは作家の黄春明（ワン・チュンミン）さん。フィリピンからはやはり作家のシオニール・ホセさん。日本からは小田実さん。それから韓国から発言者として趙東淑（チョ・ドンスク）さん。以上でパネリストと発言者の全員を紹介しました。

これからシンポジウムに入るんですけれども、私は日本社会文学会の代表世話人を務めている西田勝です。この二日間の座長を務めるのは私と、私の横に座っていらっしゃる、沖縄県国際交流財団の副理事長の福地曠昭（ひろあき）さんです。二人で交互に座長をやることになっています。

失礼しました。大事な人を一人、忘れておりました。ソ連からワレリー・ポウォリャエフさんが、はるばるときていらっしゃいました。申し訳ありませんでした。いやどうも、歳を取ってぼけてきているようです。（笑）

では順序として、これからシンポジウムの趣旨について簡単にお話して、パネリストの最初の問題提起に移って行きたいと思います。

「文学は心の扉を開く」

占領というものは、皆さんも御存知のように大昔からあったわけですけれども、特に一五、六世紀以来、占領というものは、現代の世界を扱う点において、非常に重要な問題になってきております。逆にいえば占領という問題を除いては、現代の歴史、現代の文学は語れない、と言ってもいいかと思います。この二日間にわたって行なうシンポジウムの目的は、特にアジア・太平洋の地域を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook